

ORCHESTRA CLASSICA

オルケストラ・クラシカ | 第9回定期演奏会

2021年4月29日(木祝)14:00開演

江戸川区総合文化センター 大ホール



Orchestra
CLASSICA

演奏曲目

レスピーギ:リュートのための古い舞曲とアリア 第1集

ボッシ:ゴルドーニ間奏曲

(休憩 20分)

ハイドン:チェロ協奏曲第1番 ハ長調

ハイドン:交響曲第81番 ト長調

ごあいさつ

オーケストラ・クラシカの演奏会にお越しくださり、誠にありがとうございます。
2020年4月29日に予定していた演奏会を1年の延期を経て開催いたします。

2019年に始まったコロナ禍は社会全体に大きな影響をもたらし、
未だ終息の見通しが立っていません。

演奏で生計を立てない私達アマチュアオーケストラにはとりわけ「不要不急」の烙印が重く、
演奏会を開くこと、またリハーサルを含めた活動そのものの正当性を厳しく自問させられました。

素敵なことに触れたい、自らを向上させたい、誰かとともに過ごしたい…
それはみな「より良く生きたい」という願いから発するのではないのでしょうか。
そして、その願いこそが人を人たらしめるのではないかと。

身体に生命に関わる危機が叫ばれる今こそ、人として生きるためには文化も必要だと信じ、
そして私達アマチュアもその文化を構成するひとりだと信じ、本日の演奏会をお届けします。
十分な感染予防策を講じましたので、何卒ご理解とご協力を賜れますようお願い申し上げます。

苦しい日々を乗り越えるために、皆様と共に、文化の粋を。

事務局長 鉢村 優

レスピーギ(1879 - 1936)：リュートのための古い舞曲とアリア 第1集

レスピーギは20世紀イタリアの作曲家。音楽的題材を祖国イタリアの文化に見出し、大管弦楽を駆使してそれを豪華華麗に表現することを得意とした。一方で彼は古代ローマの楽曲の研究に熱中し、それを素材に新しい作品を生み出すことにも努めた。この場合レスピーギは表現対象だけでなく、その手法をも古典に根ざしている。

ローマ市にあるサンタ・チェチリア音楽院での16-18世紀の楽曲の研究から生まれたのが「リュートのための古い舞曲とアリア」と題する3つの組曲である。第1・第2集はオーケストラのために、第3集は弦楽合奏のために書かれている。第1集は16世紀に由来するリュート曲を管弦楽編曲した4楽章から成り、1917年に完成された。アルカイックな素朴さの中に現代的な和声の混ざる、特徴的な響きである。

1. Balletto: S.モリナーロの作品「オルランド伯爵」(1599年)による
2. Gagliarda: V.ガリレイの作品(1550年代)による
3. Villanella: 16世紀末の作者不明の作品による
4. Passo mezzo e Mascherada: 16世紀末の作者不明の作品による

ボッシ(1861 - 1925)：ゴルドーニ間奏曲

イタリアの音楽一家に生まれたボッシはオルガニストとして名声を博し、彼が確立したオルガン指導法は現在もイタリアで使用されているという。作曲家としても管弦楽、オペラ、宗教作品や室内楽、声楽曲といった幅広い分野に作品を残したが、現在ではあまり演奏機会は多くない。

そのうち1905年に完成された『ゴルドーニ間奏曲』は最も演奏される作品で、イタリア近代演劇の祖ゴルドーニへのオマージュとして作曲された弦楽合奏曲である。ゴルドーニが生きた18世紀のパロック音楽の形式で書かれている。第5楽章はコンサートマスターによる長大な独奏があるほか、随所に首席奏者による印象的なソロがちりばめられている。

1. Preludio e minuetto
2. Gagliarda
3. Coprifuoco
4. Minuetto e musetta
5. Serenatina
6. Burlesca

ハイドン: チェロ協奏曲 第1番 ハ長調

ハイドン(1732-1809)はオーストリアの辺境に生まれ、ハンガリー有数の貴族エステルハージ侯の宮廷で楽長を務めた。エステルハージ家は代々音楽を好む家柄で、30年にわたって仕えたハイドンだけでなく、同宮廷楽団のチェロ奏者を父にもつリストや、音楽教師として働いたシューベルトなどゆかりの音楽家は多い。

本作は同楽団と、当時の首席チェロ奏者でありハイドンの友人であったヨーゼフ・フランツ・ヴァイグルのために1761-65年頃に書かれた。その後長らく行方不明になっていたが、1961年にプラハの国立博物館で筆写譜が見つかって蘇り、現在ではチェロ協奏曲の中でも指折りの傑作として愛奏されている。

1. Moderato
2. Adagio
3. Allegro molto

ハイドン: 交響曲 第81番 ト長調

1784年、ハイドン52歳の年に書かれた。壮年期以降のハイドンにはしばしばW.A.モーツァルト(1756-1791)の影響が表れ、この交響曲もその一つである。24も歳の離れた二人は互いの創作にインスピレーションを受け、手紙を交換するように作品を書き続けたのである。

モーツァルトはハイドンの「ロシア四重奏曲」に刺激を受けて6つの弦楽四重奏曲(いわゆる「ハイドンセット」)を作曲する。そのうち6曲目にあたる第19番は第1楽章の序奏に非常識ともいえる和声を持ち、「不協和音」の愛称で呼ばれている。

ハイドンがそれに応えて書いた本作も冒頭に不思議な音程が登場する。チェロが8分音符でソの音を弾き、第2ヴァイオリンがファの音を弾く・・・という珍しい音程は、その後も第1楽章を組み立てる重要な素材として用いられる。第3楽章にも不思議な響きが登場するなど、随所に和声の探求が試みられている。

1. Vivace
2. Andante
3. Minuet - Trio
4. Finale. Allegro

(曲目解説 鉢村 優)



大森 悠 OHMORI Haruka

音楽監督／指揮

1969年東京都生まれ。都立西高校管弦楽部でオーボエを始め、東京大学進学後は東京大学音楽部管弦楽団に所属する。卒団後プロ奏者に転向し、在京オーケストラの客演奏者を務める一方、ソリストとして各地のオーケストラと協奏曲を協演。2001年に初リサイタル。その後ドイツ・バンベルクに留学し、当時のバンベルク交響楽団首席奏者であったオットー・ヴィンター氏に師事する。帰国後まもなくセントラル愛知交響楽団に入団、大阪交響楽団首席奏者を経て、2008年より大阪フィルハーモニー交響楽団に首席奏者として在籍している。2014年5月には大阪フィル公演においてモーツァルトのオーボエ協奏曲のソリストを務めた。これまでにオーボエを池田肇、井口博之、オットー・ヴィンターの各氏に師事。また、指揮者としては、当団を率いて信濃楽友会とブラームス「ドイツレクイエム」、ヴィヴァルディ「グローリア」等を共演。当団以外ではブルーメン・フィル、関西シティフィル、伊丹シティフィル等に客演している。

「古典」という言葉には、どうしても「古いもの」というイメージがついてまわります。

しかし18世紀から19世紀の時代の変革期を生きていた人々にとって、
その音楽は極めて斬新なものでした。

むしろその後の、いわゆる「ロマン派」と呼ばれる音楽の方に、
より復古的な側面を見て取ることもできるのです。

(和声やリズム法、楽器の使用法は大きく革新されましたが、
使っている音素材は民謡が多く、

題材にも古くからヨーロッパに伝わる民話が多く用いられています)

このオーケストラの目標は、いわゆる古典派音楽の、現代にも通用する「新しさ」に注目し、
それを楽しいもの、美しいものとしてお客様と共有することです。

そのためには当時において常識とされていた演奏法
(常識ゆえに楽譜に記されることが少ないのです)を身に付けねばならず、
そのうえで自由で自発的なアンサンブルを達成しなければなりません。

いわば「型から入って型から抜け出す」、です。

う〜ん、プロでもなかなかできないなあ、こんなこと。ちょっと心配になってきました…。

不肖大森の力だけではとても無理なので、信頼できるプロ奏者にも参加いただいております。

しかし一番の頼りは、アマチュアながら高い技術と意欲を持った若い団員達です。

彼らが今以上に学び成長し、クラシカにしかできない音楽がある、
といつの日か言われるようになるのが、私の音楽家としての夢の一つ、なのです。

出演者



金子 鈴太郎

KANEKO Rintaro

チェロ

桐朋学園ソリスト・ディプロマコースを経て、ハンガリー国立リスト音楽院に学ぶ。コンセール・マロニエ、国際ブラームス・コンクール、カルロ・ソリヴァ室内楽コンクールなど、国内外の数々の国際コンクールで優勝、入賞。1999、2000年イタリア・シエナのキジアーナ音楽祭にて名誉ディプロマを受賞。2004年松方ホール音楽賞大賞受賞。2008年1月のバッハ：無伴奏チェロ組曲全曲演奏会が高く評価され、音楽クリティック・クラブ奨励賞を受賞。仙台フィルハーモニー管弦楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団、大阪交響楽団、長岡京室内アンサンブル等とコンチェルトを共演。NHK「名曲アルバム」、NHK-FM「名曲リサイタル」に出演。ソロの他にも室内楽に意欲的に取り組み、安永徹、市野あゆみ、エンリコ・オノフリ、大山平一郎、上田晴子氏など世界的に活躍するアーティストと多数共演。バロックから現代曲までの幅広いレパートリーを演奏し、これまでに日本やハンガリー、オーストリアにおいて数々の世界初演をおこなう。01年ハンガリーで現代音楽グループ "shyra" を結成。2003年～2007年 大阪交響楽団首席チェロ奏者、2007年～2008年大阪交響楽団特別首席チェロ奏者。現在は各オーケストラにゲスト首席として招聘されるほか、サイトウ・キネン・オーケストラ、ジャパン・ヴィルトゥオーゾ・シンフォニーオーケストラ等で活躍中。トウキョウ・モーツァルトプレーヤーズ首席、Super Trio 3°C、ZAZA quartet、長岡京室内アンサンブル各メンバー。Music Dialogue アーティスト。



上敷領 藍子

KAMISHIKIRYO Aiko

ゲスト・コンサートマスター

東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校を経て、同大学音楽学部を三菱地所賞を受賞し首席卒業。同大学大学院修士課程を修了。学内にて二度のアカサス音楽賞を受賞。また2011年よりオランダ・マーストリヒト音楽院にて研鑽を積み、特別賞を得て首席卒業。これまでに 第1回宗次エンジェルヴァイオリンコンクール第3位、第22回摂津音楽祭第1位、バルレッタ国際音楽コンクールにて特別賞付第1位(イタリア)、マルコ・フィオリンド国際音楽コンクールにて第2位(イタリア)、レオポルド・ベラン国際音楽コンクール第1位(フランス)など国内外において受賞多数。芸大モーニングコンサートに出演。青山財団より青山音楽賞新人賞を受賞。これまでにポーランドクラクフ室内管弦楽団、大阪センチュリー交響楽団、オーケストラアンサンブル金沢、藝大フィルハーモニア管弦楽団等と共演。2012年度上半期、野村財団奨学生。現在はソロ、室内楽、オーケストラ客演等幅広く活動をする傍ら、京都コンサートホール主催「Join us!キョウト・ミュージック・アウトリーチ」第1期登録アーティストとして子供たちに音楽を届ける活動にも力を入れている。

オーケストラメンバー

室内管弦楽団オーケストラ・クラシカは、大阪フィルハーモニー交響楽団首席オーボエ奏者・大森悠の提唱のもと、2013年12月に発足した。東京大学音楽部管弦楽団のOBを中心に、優れたプロ奏者の支援を得て演奏活動を行っている。ハイドンを中心とする古典作品と、その粋を受け継ぐ近現代作品を取り上げ、すぐれて自然で自由なアンサンブルによって管弦楽の理想を追求することを目指している。

音楽監督	事務局長	会計・広報	庶務	ステージマネジャー	
大森 悠	鉢村 優	築山 道乃	大岡 英史 関 護和 仲田 穂子	米村 美紀	
Concert Master	2nd Violin	Viola	Contrabass	Fagott	Harp
上敷領 藍子	○兼岡 健一 岡田 征三 橋本侑里映 村田 紘子 山口 陽子 吉野 千夏	○松本 明日香 安宅 未来 小林 賢人 柴田 淳志 宮本 和枝	○櫻井 美果 岡司 陽平	多湖 正夫 服部 健太	鈴木 真希子
1st Violin		Violoncello	Flute	Horn	Cembalo
今村 優里 岡本 直毅 高山 正行 吉田 弘幸 若林 陽子		○高木 優帆 永井 彩未 廣居 剛 村山 怜子	上田 美由 大岡 英史	関 護和 鳥谷 啓	長久 真実子
			Oboe	Trumpet	
			櫻井 文香 高島 綾 長岡 佳奈	福島 悠介	
					○首席奏者

今後の演奏会

■オーケストラ・クラシカ第10回定期演奏会

2021年12月18日(土)14:00開演 神奈川県立音楽堂 音楽監督・指揮=大森 悠